

初級フランス語における スピーキング能力可視化の試み —CEFR-J自己評価、タスク評価、 学習ストラテジー調査を利用して—

伊藤 玲子(東京外国語大学博士前期課程)
関 敦彦(東京外国語大学博士前期課程)
佐藤 千秋(東京外国語大学博士前期課程)
川口 裕司(東京外国語大学)

本研究の目的

CEFR-J準拠の言語能力自己評価:

東京外国語大学 2012年から導入

- ◆言語能力自己評価の先行研究: 川口、杉山(2014)
- ◆スピーキングに関する先行研究: KOGA & SUGIYAMA(2015)

言語能力自己評価
スピーキングタスク評価
学習ストラテジー

スピーキング能力を可視化

発表の流れ

1. 言語能力自己評価分析
2. スピーキングタスク評価分析
3. 学習ストラテジー分析
4. スピーキング能力の可視化
5. 結論
参考文献

1.言語能力自己評価分析

1.1.言語能力自己評価アンケート

◆実施:

2015年1月17名、5月9名

◆対象:

東京外国語大学2年生 26名

	言語文化学部	国際社会学部	合計
男子	1名	4名	5名
女子	11名	10名	21名
合計	12名	14名	26名

◆5技能(A1-C2):

聞く、読む、話す(やりとり)、
話す(発表)、書く 合計110問

理解(聞くこと)

8. ゆっくりはっきりと話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる。

1. 全然できない 2. あまりできない 3. ほぼできる 4. できる

9. 身近なものであれば、文字が発音されるのを聞いて、どの文字かわかる。

1. 全然できない 2. あまりできない 3. ほぼできる 4. できる

1.2. 分析する技能・レベル

- ◆2技能: 話す(やりとり)、話す(発表)
スピーキングタスク評価との比較のため
 - ◆分析レベル: A1, A2のみ
(除外: B1-C2、ほとんどの学生が「1:全然できない」と選択)
- 大学2年生の学習到達目標レベル(A1, A2)と一致

1.3. レベルのクラスター分析 (平方ユークリッド距離、ウォード法)

グループ2

言語能力自己評価が中間のレベル:

A1 と A2

グループ1

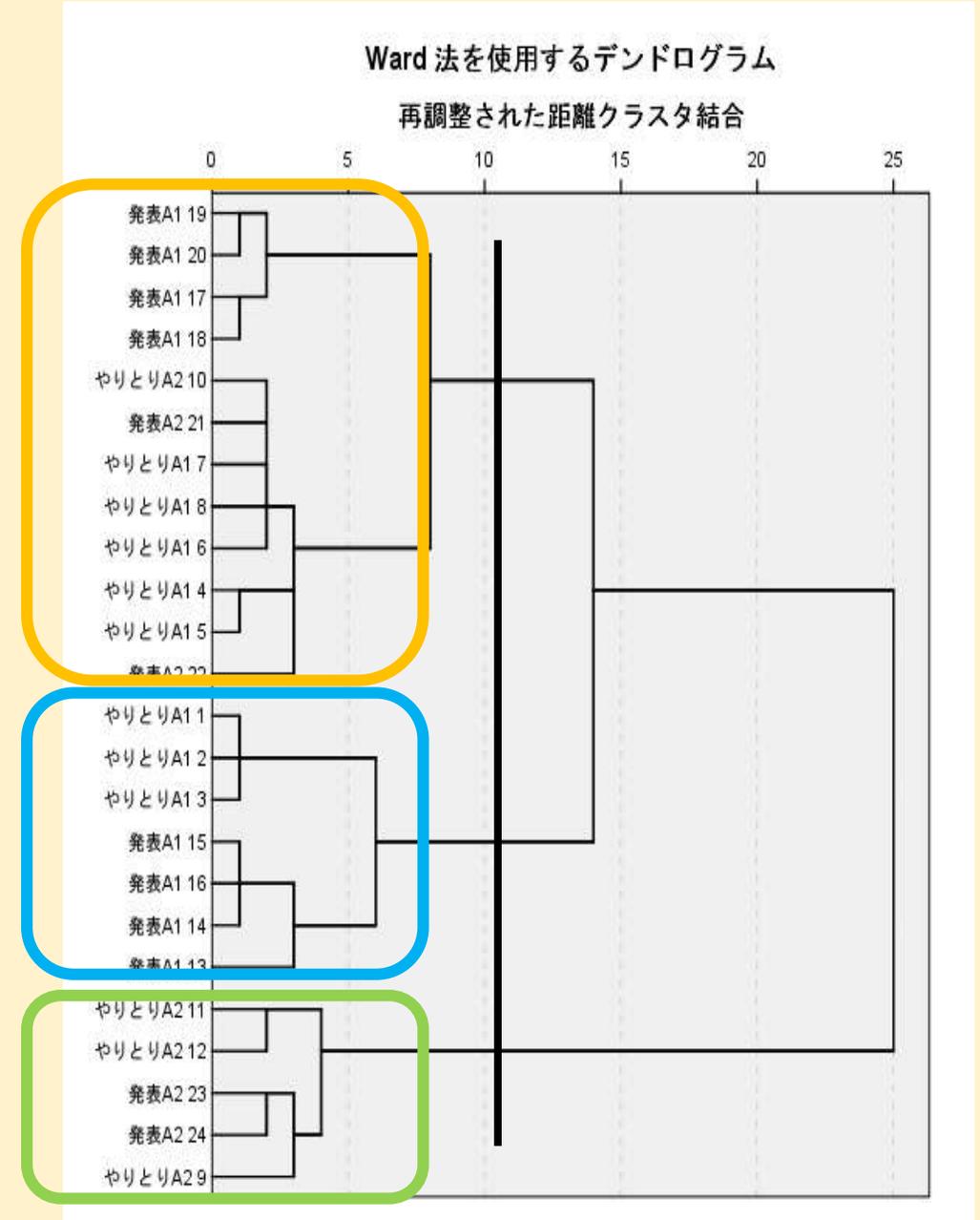
言語能力自己評価が高いレベル:

A1のみ

グループ3

言語能力自己評価が低いレベル:

A2のみ



1.4. 学生のクラスター分析 (平方ユークリッド距離、ウォード法)

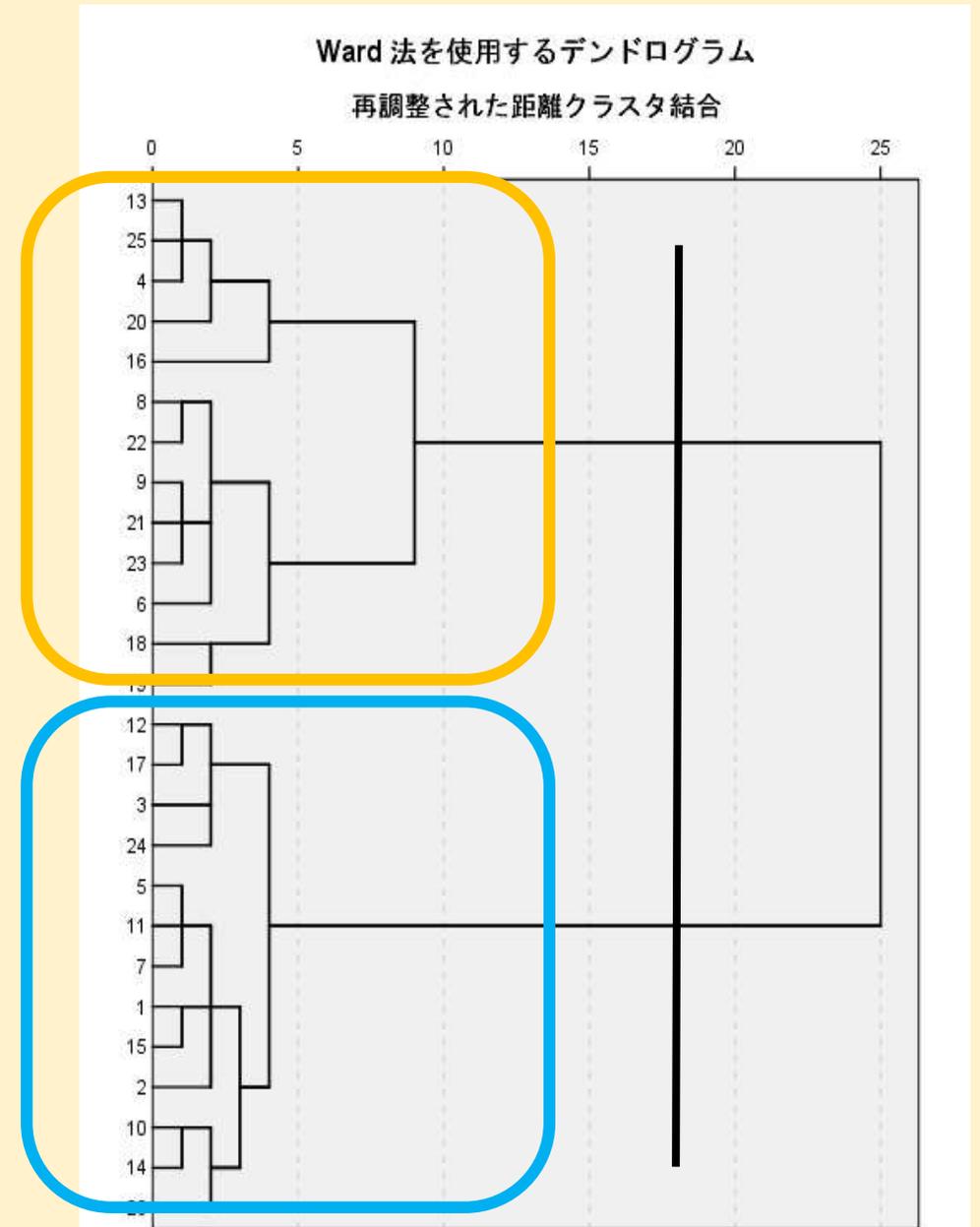
グループ1

言語能力自己評価が低い学生たち

グループ2

言語能力自己評価が高い学生たち

◆学生には、学部・性別・海外経験における有意差はなかった



1.5. 結論

- ◆「話す（やりとり）」「話す（発表）」のレベル
 - A1: 言語能力自己評価が高い回答が多かった
 - A2: 言語能力自己評価が低い回答が多かった

- ◆学生

学部

性別

海外経験



有意差なし

2. スピーキングタスク評価

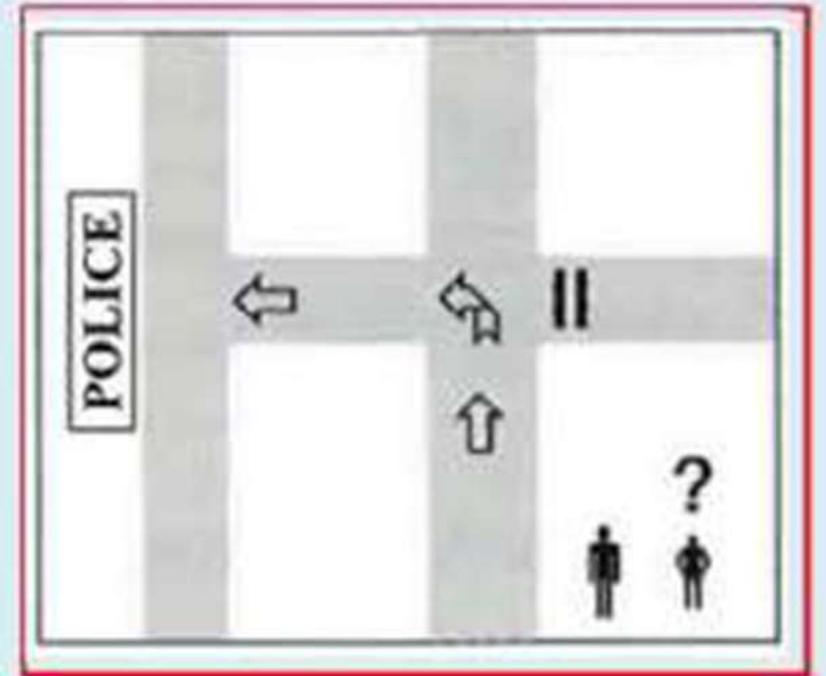
2. 1. スピーキングタスク

CEFR-Jの話す(発表)、話す(やりとり)に関するA1とA2のタスクを21問出題。

Q10 夏と冬ではどちらが好きですか？
その理由も答えてください。

Q15 (地図を見ながら)あなたは、道を尋ねられました。交番までの行き方を説明してください。

以下の画像を見てください。



あなたは、道を尋ねられました。

交番までの行き方を説明してください。

2. 2. スピーキングタスクの評価手順

◆評価者:

言語学を専攻するフランス語ネイティブ話者2名

◆4段階尺度:

3. Très bien (とてもよい)、2. Bien (よい)、

1. Passable (まあまあ)、0. Mauvais (悪い)

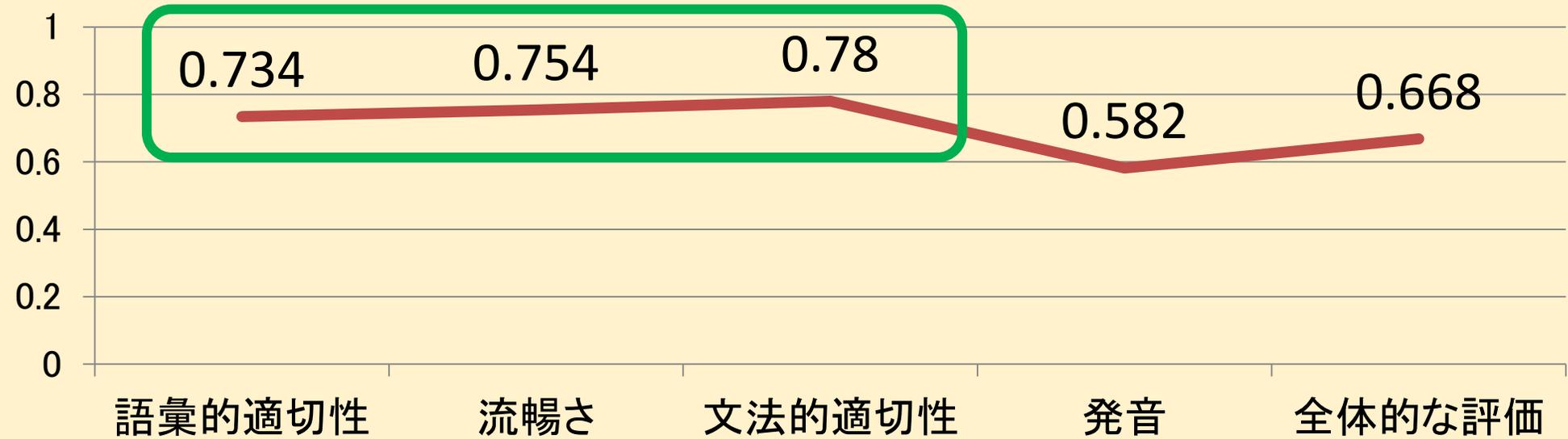
◆5つの評価観点:

1. 語彙的適切性、2. 流暢さ、3. 文法的適切性、

4. 発音、5. 全体的評価

スピーキングタスク評価の一致度

Cronbachアルファの信頼性係数を使用



本発表では一致度の高い「語彙的適切性、流暢さ、文法的適切性」の観点のみを分析。

2. 3. スピーキングタスク評価による学生のグループ分け

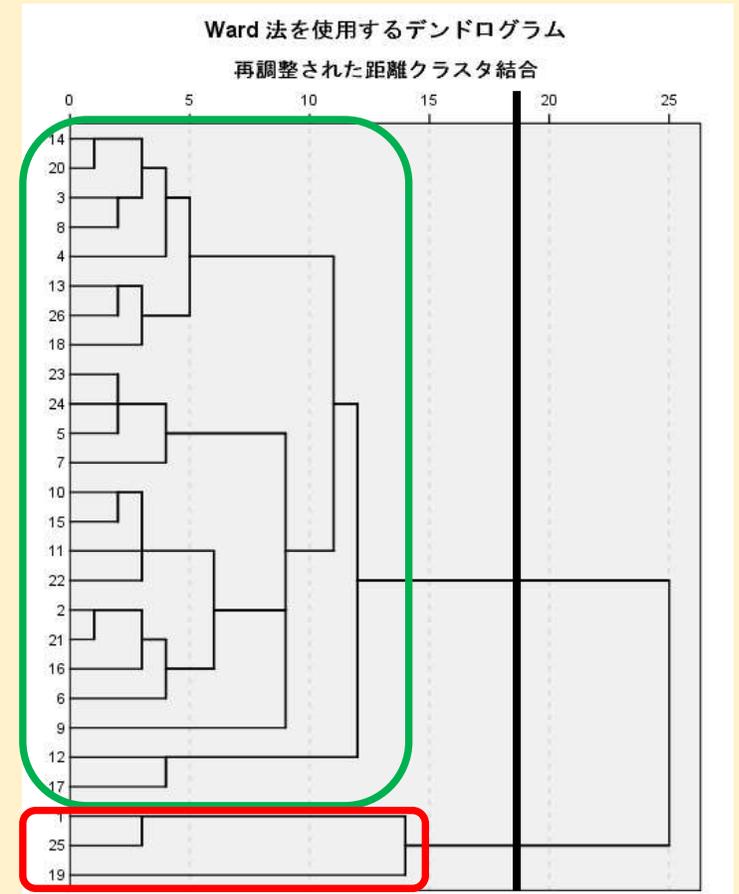
クラスター分析(ユークリッド距離・ウォード法)

上位グループ平均: 2.34点

下位グループ平均: 2.10点

$t=2.66$, $n=24$, $p=.014$

グループ間に有意な差が見られる。



2. 4. 発音項目での差

◆Cronbachの信頼性係数が低い発音の観点で二人の評価に差が出たタスクの特徴。

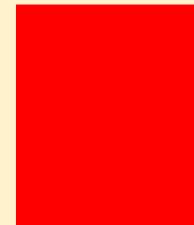
いずれもA1レベルのタスク。

かつ、はい/いいえ、もしくは一言で答えられるタスク。

例

Q2 Aujourd'hui quel jour sommes-nous ? (今日は何日ですか?)

Q6 C'est quelle couleur ? (これは何色ですか?)



回答例

Q2 (Nous sommes) le 15 mai.

Q6 (C'est) rouge.

仮説

二人の評価者は出身地が異なる。(トゥール、エクサン=プロヴァンス近郊)

回答が短いと、判断する要素が少ないため評価者本人の規範に左右されやすくなるのでは？

結論

- ◆スピーキングタスク評価において、上位グループと下位グループの間には優位な差が見られた。
 - ◆発音の観点ではほかの観点と比べ比較的評価者の基準に違いが見られる。
 - ◆二名の評価者の間でスピーキングタスク評価（発音）が分かれやすい問題の特徴。
- A1レベル、かつ一言で回答が可能。

3.スピーキング学習ストラテジー分析

◆実施日:2015年5月22日

◆全54項目

うちストラテジーに関する質問は51項目

◆各カテゴリー数

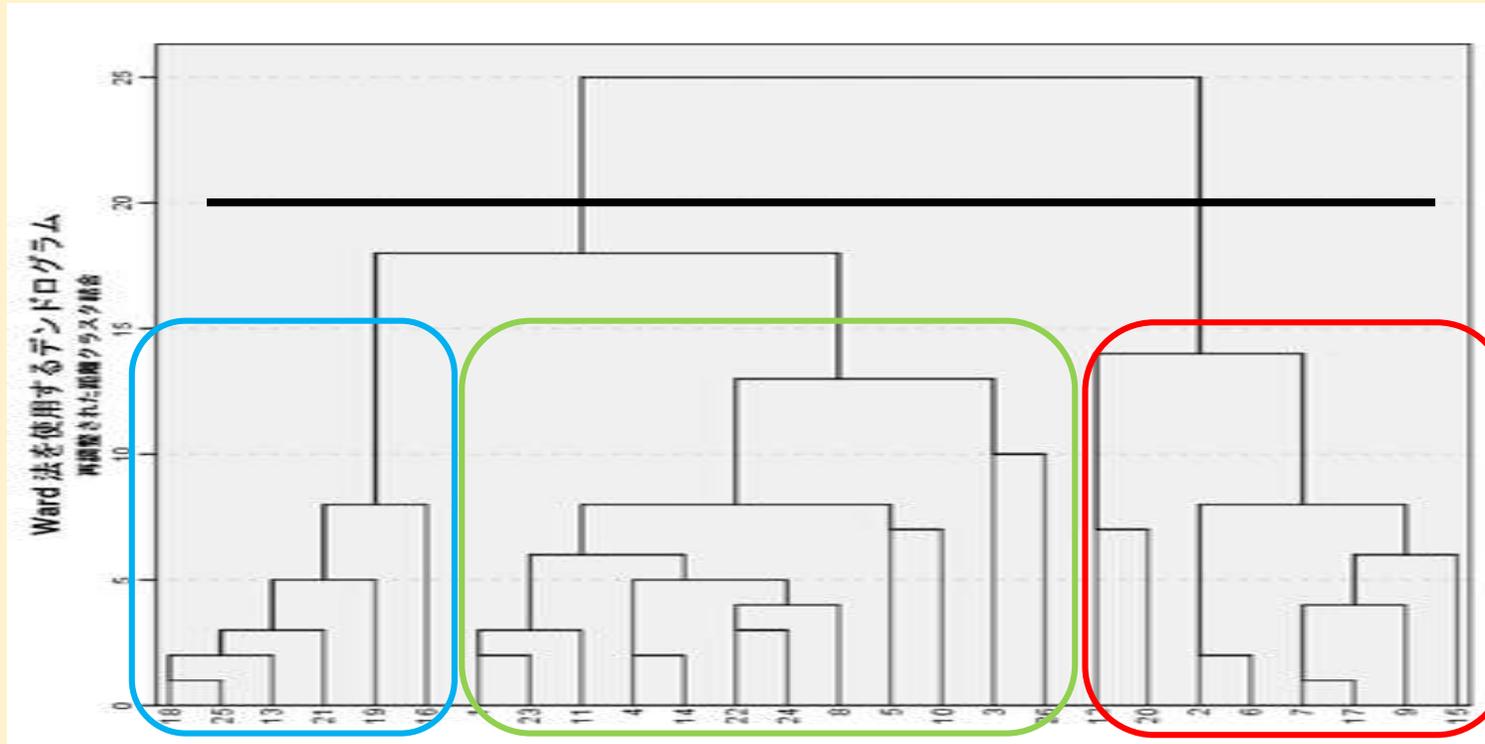
メタ認知(MET):15, 認知(COG):14, 補償(COM):14, 情意(AFF):4, 社会(SOC):4

◆回答方法:

●項目4～54は、それぞれ1～6(1:全く当てはまらない、2:あまり当てはまらない、3:ときどき当てはまる、4:通常当てはまる、5:よく当てはまる、6:常に当てはまる)のなかで、最も自分に当てはまる数字を選んで丸してください。

		全く 当てはま らない	あまり 当てはま らない	ときどき 当てはま る	通常 当てはま る	よく 当てはま る	常に 当てはま る
項目	参考とする頻度指数	0%	～20%	～40%	～60%	～80%	～100%
■ 普段の生活の中で							
4	スピーキング能力向上のために、明確な目標を立てる	1	2	3	4	5	6
5	予定を立て、スピーキングの練習に十分時間をあてる	1	2	3	4	5	6
6	自分のスピーキング能力の進歩について考える	1	2	3	4	5	6

3.1. 学生による分類



グループ1
あまり用いない:
6名
Avg 2.56

グループ2
ときどき用いる:
12名
Avg 3.17

グループ3
通常用いる:
8名
Avg 3.54

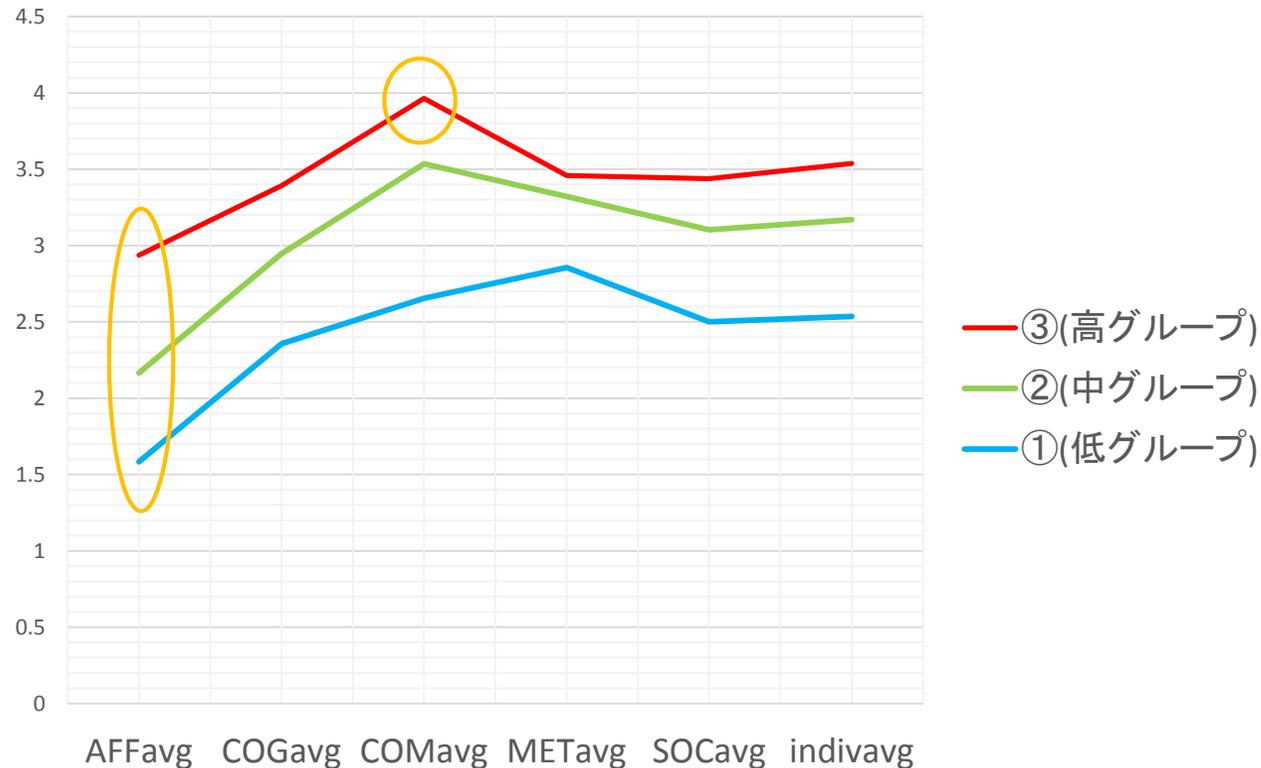
学生を3つのグループに分類
(平方ユークリッド距離、
ワード法)

分散分析、Tukeyの多重比較の結果、3つのグループのそれぞれの間に平均値の差は0.05水準で有意。

3.1.学生による分類

グループ1~3の全体平均値をカテゴリーごとに出した。

3グループにおける各カテゴリーごとの
全体平均値



3: 全てにおいて高い数値。特にCOMを多く用いている。

例) Q39. 知らない単語の意味を推測する。

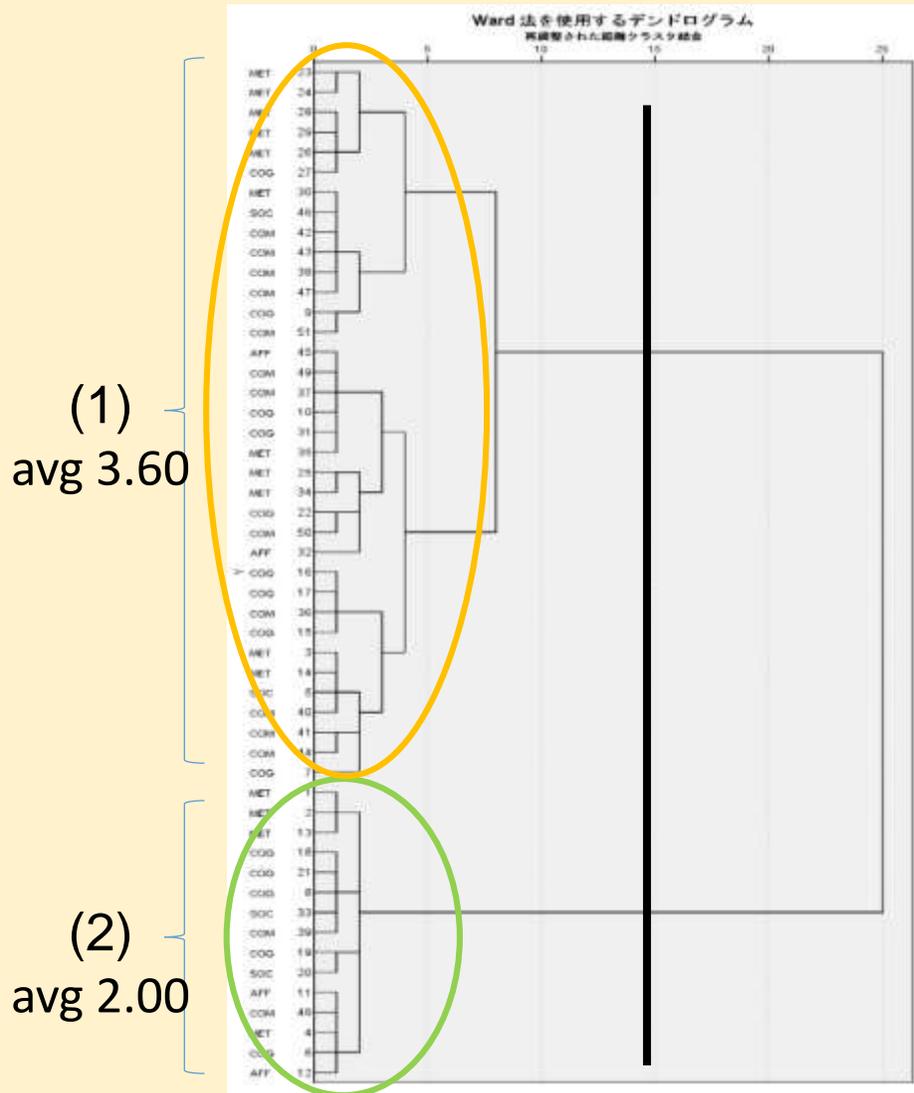
Q45. なじみのある単語を使う。

1: 他と比べ全てにおいて低い。

AFF: どのグループにおいても低い値。

例) Q14. フランス語学習に関する自分の感情や考えたことを書き留める。

3.2.学習ストラテジーのカテゴリーによる分類



全51問を(1)(2)グループに分類(平方ユークリッド距離、ウォード法)

(1)(2)の平均値の差は0.01水準で有意。
($t=10.182$, $n=49$, $p=.000$)

→(1)(2)に平均値の差はあったが、学習ストラテジーのカテゴリーごとに特徴はない。

3.3.結論

◆学生グループ間の相違

学習ストラテジーを多用する学生：全てのカテゴリーにおいて数値が高く、特に補償ストラテジー（COM：知らない単語を推測したり言い換える、ジェスチャーで言いたいことを伝える等）を多く用いている。

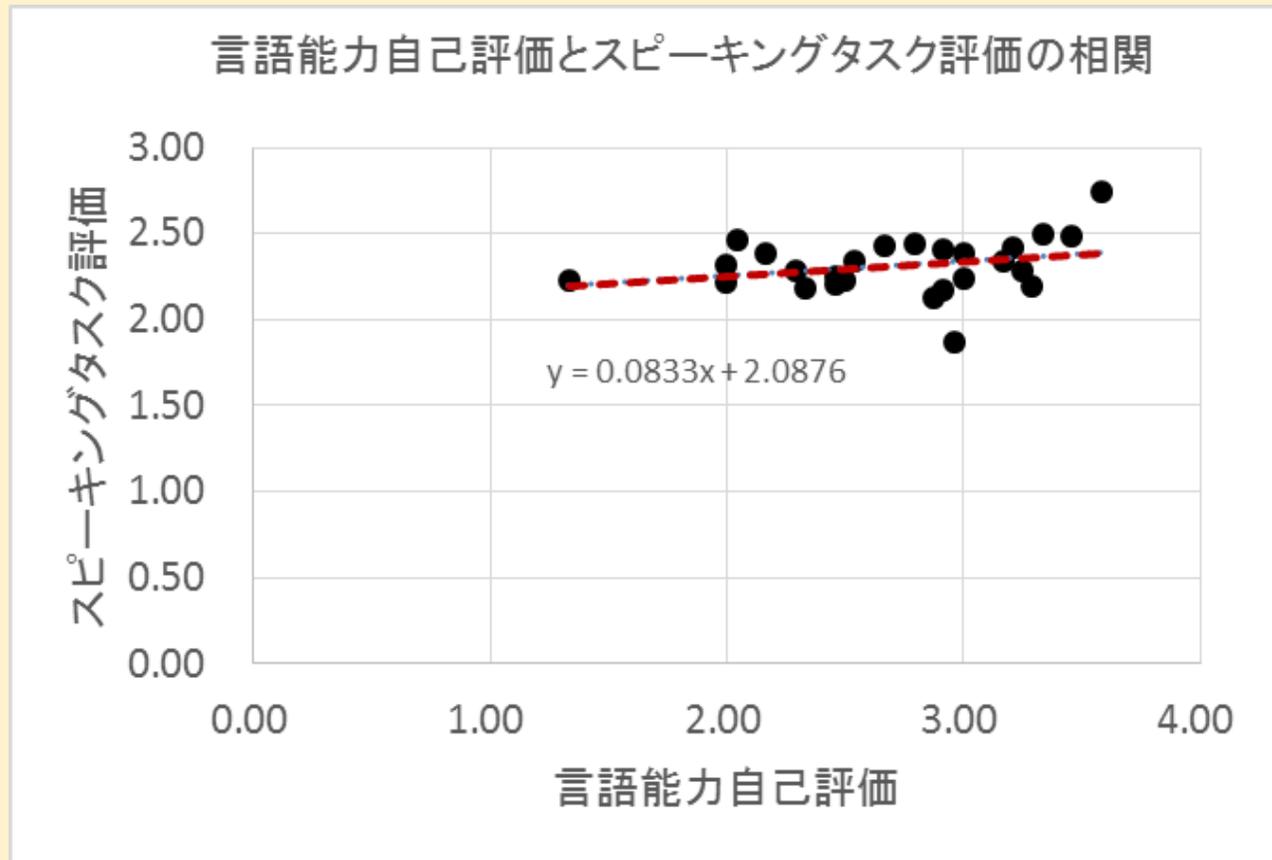
あまり用いない学生：他と比べ全てにおいて数値が低い。

◆情意ストラテジー(AFF)について

情意ストラテジー(AFF)は用いられることが少ない傾向にあることから、学生は学習中の情意的側面を重要視していない。

4.スピーキング能力の可視化

4.1.言語能力自己評価とスピーキングタスク評価



弱い正の相関関係がある
が有意ではない。

記述統計量

	平均値	標準偏差	N
CEFR	2.7135	.54114	26
Speaking	2.3138	.16337	26

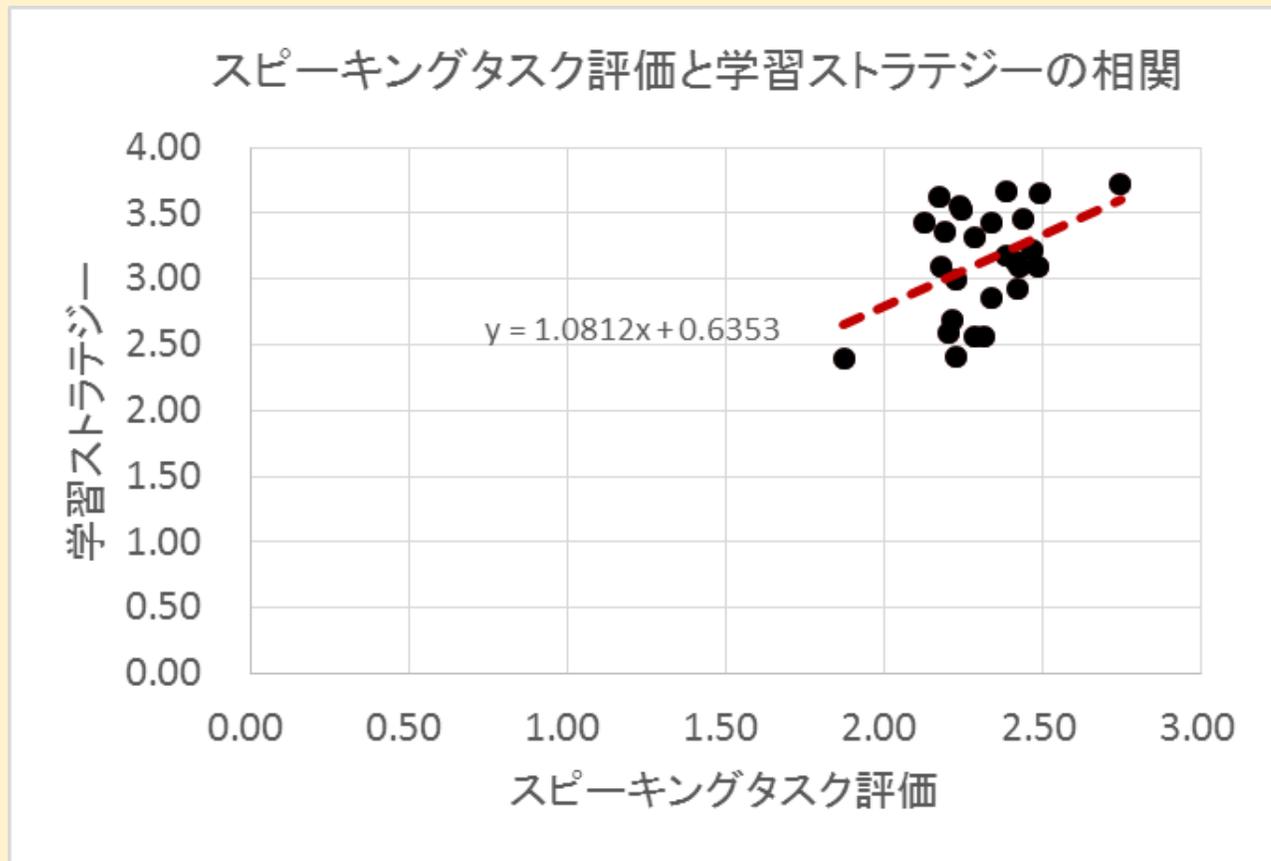
相関係数

		CEFR	Speaking
CEFR	Pearson の相関係数	1	.273
	有意確率 (両側)		.178
	N	26	26
Speaking	Pearson の相関係数	.273	1
	有意確率 (両側)	.178	
	N	26	26

4.2.スピーキングタスク評価と学習ストラテジー

5%水準で有意な正の相関関係がある。

→スピーキングタスク評価が高い学生ほど、学習ストラテジーを多く用いる傾向がある。



記述統計量

	平均値	標準偏差	N
Speaking	2.3138	.16337	26
Strategy	3.1373	.40968	26

相関係数

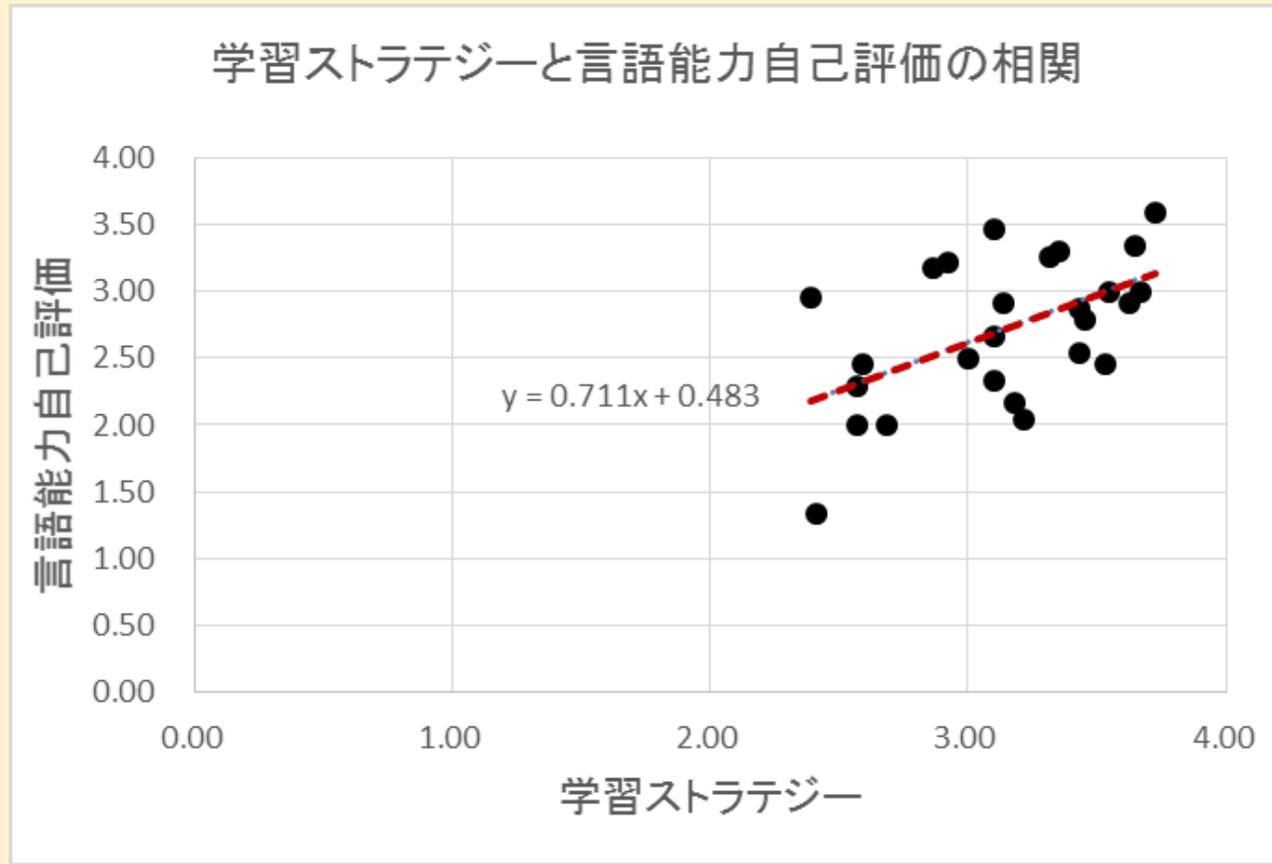
		Speaking	Strategy
Speaking	Pearson の相関係数	1	.433*
	有意確率 (両側)		.027
	N	26	26
Strategy	Pearson の相関係数	.433*	1
	有意確率 (両側)	.027	
	N	26	26

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

4.3. 学習戦略と言語能力自己評価

1%水準で有意な正の相関関係がある。

→ 言語能力自己評価が高い学生は、学習戦略を多用している傾向にある。



記述統計量

	平均値	標準偏差	N
Strategy	3.1373	.40968	26
CEFR	2.7135	.54114	26

相関係数

		Strategy	CEFR
Strategy	Pearson の相関係数	1	.536**
	有意確率 (両側)		.005
	N	26	26
CEFR	Pearson の相関係数	.536**	1
	有意確率 (両側)	.005	
	N	26	26

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

5. 結論

調査の結果、学習ストラテジーと言語能力自己評価の間には1%の水準で有意な強い相関があり、スピーキングタスク評価と学習ストラテジーにも5%の水準で有意な相関があることが明らかとなった。

これにより、言語能力自己評価が高く、スピーキングタスク評価が高い学生は、学習ストラテジーを多用する傾向があることが分かる。

よって、初級フランス語のスピーキング能力可視化のためには、まず学習ストラテジーの分析を行うことが重要である。

今度の課題

- ◆被験者数の確保
- ◆スピーキングタスク評価者数
- ◆経年的分析
- ◆スピーキング能力可視化のための指標の多元化

参考文献

- 伊東 祐郎, 「日本語学習者の学習戦略選択」, 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 19, 1993, 77-92.
- 川口裕司, 杉山香織, 「初級フランス語における達成度指標 CEFR-Jを用いた自己評価とタスク評価との関係」, 『ふらんぼー』 39, 東京外国語大学フランス語研究室, 2014, 131-149.
- 投野由紀夫, 『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』, 大修館書店, 2013.
- 馬場哲生, 『英語スピーキング論 話す力の育成と評価を科学する』, 河源社, 1997.
- 原田早苗, 「効果的な外国語学習戦略とは?」, 『フランス語教育』 26, 日本フランス語教育学会, 1998, 57-63.
- 吉島茂 他訳, Trim, J., North, B. & Coste, D., 『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』, 朝日出版社, 2004.
(原著 *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*, 3rd printing, 2002.)
- Cohen, E., Oxford, R. L., & Chi, J C. *Language Strategy Use Survey. Center for Advanced Research on Language Acquisition.* University of Minnesota, 2002.
- Fulcher, Glenn, “Reserch timeline”, *Language Teaching* 48/2, 2015, 198-216.
- Huang, Xiao-Hua, Margaret, Van Naerssen, “Learning Strategies for Oral Communication”, *Applied Linguistics* 8/7, 1987, 287-307.
- Koga, K., Sugiyama, K., “Fluency in Oral Tasks by Japaneses Beginner Learners of French From the Perspective of Temporal Measuring”, *Flambeau* 40, 2015, 120-135.
- Nakatani, Y. *Developing an oral communicationstrategy inventory, The Modern Language Journal* 90(2), 2006, 151-168.
- Oxford, R. L, *Language learning strategies: What every teacher should know.* New York: Newbury House, 1990.
- Purpura, J. M, *Learner strategy use and performance on language tests: A structural equation modeling approach*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1999.
- Towell, R., R Hawkins and N Bazergui, “The development of fluency in advanced learners of French”, *Applied Linguistics* 17/1, 1996, 84-119.

謝辞

本研究は、

JSPS科研費 26284076「Eラーニングに基づく英語とフランス語の学習行動の可視化の試み」、基盤研究B, 2014-2016, 代表者 吉富朝子

の助成を受けたものです。